

* ばくろう思い出館

「ばくろう思い出館」(以下、本館)は、創立100周年を記念し、平成13年に博労小学校校内の空き教室(音楽室)を活用して設立されました。本館は同校同窓会が運営し、主に在校生・卒業生とその家族に向けて、卒業記念作品約30点を順次公開しています。卒業記念作品は校内の保管室に大切に整理・保管され、現在は広島大学・蜂谷昌之准教授を中心に卒業記念画のデータベース化が進められています。卒業生がパソコン上のデータベースを閲覧することで、自分の卒業記念作品と対面し、複製を持ち帰ることもできます。本館は、お正月とお盆に開館し、帰省の時期に同窓の友人との再会や交流の場として機能し、ふるさとや子ども時代を懐かしむ卒業生たちで賑わいを見せています。



ばくろう思い出館 館長
松本一郎 昭和27年度卒業(52回)

学校のすぐ近くを千保川が流れていた。どこから流れてきているのかよく知らなかった。とても青く透明で、浅い所はひざまで、少し深くなると腰までであったと思う。夏はとても冷たく手ですくい喉を潤おし美味かった。川砂や小砂石が足の裏に当たり気持ち良かった。時々、上流の鉄橋を蒸気機関車が眠たそうに走っていたのが記憶にある。川面には鮒や、トンボ、小鳥が遊んでいて、話かけているかの様で微笑ましい。1、2年生の頃は水浴び程度であったが、次第に「赤ふんどし組」の5、6年生から泳ぎ方を教えてもらい「白ふんどし組」の自分も段々と流れに向かって泳げるようになりとてもうれしかった。先生がいないので「赤ふんどし組」は事故のないよう真剣であった。支流にあった水門の上から飛び込む事も教えられ仲間同士で競争心が湧くようになってきた。自然と共有しながら、子供達同士の中で縦横のつながりを習得するかけがえのない経験を積んだと思う。その後、戦後復興が進み最初のプールが建設されたのが昭和25年8月、防火貯水池兼用として市内では最初のもので盛大に竣工式が行われた。

*** 「ばくろう思い出館」のお問い合わせは、高岡市立博労小学校同窓会まで ***

- 【アーカイブ放映】企画展示室2 / 協力 KNB 北日本放送
第12回民教協スペシャル / 放映時間 約45分
「12歳が描いた20世紀～ある小学校に残された1万枚の絵」
(1997年 北日本放送制作)
- 【コレクション展】企画展示室3 「プレイバック! 高岡の美術教師たち」
(9点)
子どもたちが記念画を描いた「あの頃」、高岡にはどのような美術教師たちが在籍していたのでしょうか。本展では大正期以降の高岡の美術教育を再び振り返りながら、美術教育に携わってきた当館収蔵作家をご紹介します。

高岡市美術館 昭和100年記念

あの頃みんな子どもだった

—タイムトラベル! 博労小120年の図画教育—

令和7年4月5日(土)~5月11日(日) / 高岡市美術館 企画展示室1・2・3

主催 / 高岡市美術館(公益財団法人高岡市民文化振興事業団)

共催 / 高岡市・高岡市教育委員会・北日本放送

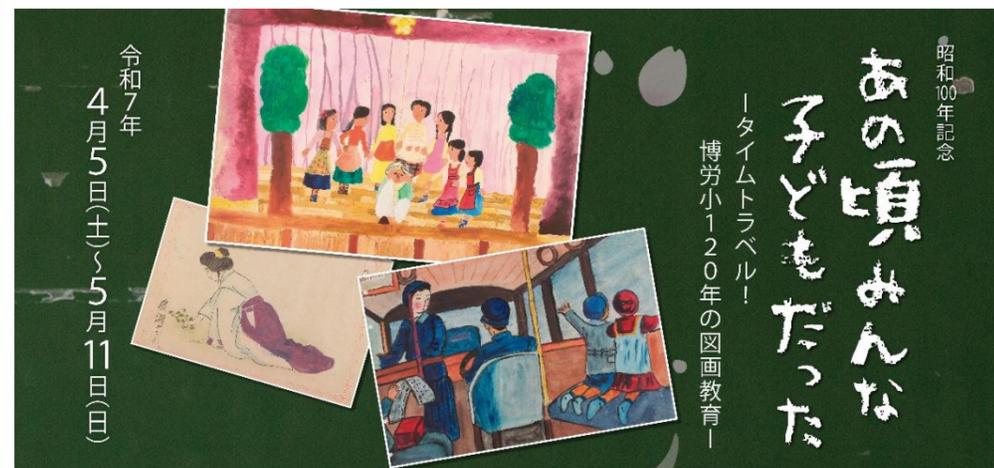
後援 / 富山県・富山県教育委員会

協力 / 高岡市立博労小学校同窓会(ばくろう思い出館)

助成 / 独立行政法人 日本芸術文化振興会

*

監修 / 蜂谷昌之(広島大学大学院 准教授)



このたび、高岡市美術館において「昭和100年記念 あの頃みんな子どもだった—タイムトラベル! 博労小120年の図画教育—」を開催いたします。

高岡市立博労小学校は、明治34年の開校当初より、卒業生による記念作品を保存してきました。その取り組みは現在まで続くものであり、図画・書・作文の約3万7千点が残されています。本展では、そのうち明治40年度より保存される図画作品に焦点を当て、明治から令和まで約300点を時代順にたどりま。これらの作品群は、同校同窓会の皆様が運営する校内の「ばくろう思い出館」にて展示されてきたものの、学外に向けて公開される機会は今までなく、120年に及ぶ作品史を概観する展示は今回が初めてとなります。これほど長期にわたる児童画の保存は、全国的にみても珍しいものであり、地域の図画教育をたどることができる記憶遺産ともいえます。この機会により多くの皆様に博労小学校の取り組み・作品を知り、時代ごとの魅力を味わっていただければ幸いです。

第一章、第二章では、戦前の作品を取り上げ、明治の手本を模写する教育から、大正に自由画教育へと移っていく過程を示します。第三章、第四章では、戦後から令和までの作品を扱います。抽象画や木版など多様化するテーマや素材、表現の工夫をご覧ください。

児童作品は、当時の図画教育の手法だけでなく、その時代を生きた子供たちのまなざしを物語ります。当時販売していた商品、高岡の繁華街の様子を描いたものや、家庭内での生活など、様々な時代背景が描かれています。皆様の子供時代の生活と比較したり、図画工作の時間を思い出したりしながらお楽しみください。



本展監修

蜂谷昌之 広島大学大学院准教授

高岡市立博労小学校は、今から124年前の明治34年、20世紀の幕開けとなる1901年に博労壘町尋常小学校として開校しました。翌年、初めての卒業生たちは筆で思い思いのこぼれ書きを寄せ書きし、学校はそれを軸にして残しました。これが卒業作品のはじまりで、学校創立当時、卒業生と学校との結びつきを願って始まった取り組みです。その後、文字だけでなく絵や作文も残されるようになり、途中、太平洋戦争の影響により7年間の欠落期間があるものの、今日まで学校の教育事業として続けられてきました。

明治、大正、昭和、平成、令和の120年にわたる卒業作品は、それぞれの時代を生きた子供たちの思いや夢を表したものであり、明治期以降の教育の進展と地域独自の教育活動の実態を今に伝える貴重な史料と言えるでしょう。今回の展覧会では、博労小学校に所蔵されている卒業作品のうち図画作品を取り上げ、明治から令和までの卒業記念画約300点を展示させていただきます。合わせて図画教科書なども展示し、美術教育の歴史的な面からもご覧いただければと思います。博労小学校の卒業記念画は明治40年度から保存されています。当時は臨画というお手本を参考に描く活動が行われており、同校の卒業作品にも臨画作品が数多く残されています。それから一世紀、図画教育は大きく変容してきました。卒業記念画にも次々に出現する題材をみることができ、百年の間、図画教育がどのように進められてきたのか、その変容や児童の表現の変化を鑑賞している中で感じ取っていただけるのではないのでしょうか。

展示作品の監修にあたっては、1万5千点を超える図画作品から、明治から令和までの時代区分により、それぞれ時代ごとに特色ある作品をわかりやすく展示することを第一に、教育思想や指導法の変化といった教育動向に留意しつつ、図画題材のバランスなどを検討し、さらに時代とともに移り変わる学校生活の様子や町の景色など、卒業作品にみられる多様な表現を鑑賞いただけるようにしました。一枚一枚の絵をとおして、美術教育の変遷を感じていただきながら、ご自身の学校生活などを振り返るきっかけとなることができましたら幸いです。

第一章 明治・大正の作品 60点(明治13点、大正47点)

明治から大正にかけての作品には、教科書などの手本を参考に描いた臨画が数多く残されている。毛筆で描かれたこのころの作品は、手本を忠実に描いたもののほか、児童自らがアレンジしたものもあり興味深い。手本には当時発行されていた国定教科書のほか、中学校や高等女学校で使用されていた図画教科書、児童雑誌の挿絵なども参考にしていたとみられ、表現力の高さがうかがえる。大正期半ばには臨画教育を否定し、自由画を提唱した画家山本鼎の自由画教育運動が高岡にも波及し、大正9年、平米町尋常小学校において「世界児童自由画展覧会」が開催、この年を境に風景画が数多く残されるようになる。このころ、新たな描画材としてクレヨンが普及し、卒業記念画にもクレヨンによる風景写生画が登場する。高岡の地域性から図画教育では専科指導が行われ、大正末には後に日本画家として活躍することになる櫻井孝一（鴻有）も教壇に立った。

第二章 昭和(戦前)の作品 71点(うち高等科児童の作品21点)

昭和に入るところには自由画教育の新鮮さも失われ、自由が放任になるなどの批判もあり、新たな教育理念や方法が求められるようになった。自由画教育運動の影響で使われなくなっていた国定教科書に変わり、民間から発行された教科書仕様の図画の参考書が使用されることが多かったという。卒業記念画にもそうした参考書の図版を描いた作品が含まれている。昭和6年には博労校下の清水町に円筒形をした配水塔が完成し、その後の卒業記念画にしばしば登場するようになる。大正11年より博労尋常小学校に2年制の女子高等科が併設された。高等科児童による卒業記念画も尋常科の作品同様に保存され、図案や静物画などが残されている。昭和16年度から昭和22年度までの作品は残されていない。直前の作品には戦時下の生活の様子を描いた作品などがある。

第三章 昭和(戦後)の作品 127点

戦後の作品は、昭和23年度より再び残されるようになった。最初は小さな配給の用紙に描かれたものである。戦後の図画工作科教育では、無教科書時代を経て昭和20年代終わりに検定教科書が発行されるようになり、新たな図画題材が次々と紹介され、個性や創造性の伸長を図る教育が推し進められていく。充実した教育実践は卒業記念画にも現れており、抽象画や空想画、多色刷りの版画やデザイン表現、物語絵など多彩な題材にみることができる。手本を模倣させたり、技術を徹底して教え込ませたりするのではなく、児童自身の思いや描き方を大切に指導していたことがうかがえる。戦後は児童数の増加により、博労小学校は2千名の在校生を有する学校となり、特に昭和30年代半ばには400枚以上の卒業記念画が残された年もある。また、学校博物館での卒業作品の展示が行われたり、創立80周年には作品集が作られたりするなど卒業記念画の活用が図られるようになった。

第四章 平成・令和の作品 47点(平成37点、令和10点)

平成から令和の作品には、水彩による風景画や生活場面を描いた版画による作品が多い。校舎や学校生活の思い出など、自分の好きな場所や風景のほか、楽しかったことや頑張ったことを振り返り、描いた作品がある。これまでの作品に比べると大型のものとなり、構図にも工夫がみられ、動きや遠近感を意識した表現が印象的である。学校に卒業の記念に自分の作品を残すという思いは、明治から変わらず受け継がれている。平成14年、創立100周年を記念して「ばくろう思い出館」が開館し、卒業作品の展示や保存、管理の体制が構築された。これにより、卒業記念画が教育活動や卒業生の交流に、より積極的に生かされるようになった。明治から令和まで続く卒業記念画の長期的な取り組みが、卒業生と学校を結ぶものとして機能し、多世代の人々の交流に役立つものとなっている。